

# 数百年後の年中行事を

## 占う小径 (こみち)

梅屋 潔うめや きよし

神戸大学大学院国際文化学研究科准教授

### 大晦日の風

今年も、その日は、風が強い日だった。痛いほどだった。大きな音を立てて風が吹きすぎた。二〇一三年一月三〇日のことである。三〇日の古来の読みは「みそか」。この地域の多くの家では新暦になってもこの日を大晦日として毎年オトシトリをおこなう。新年を迎える年越し行事である。私はその日、気仙沼市小々汐の尾形家の総本家で、オオイ（大家）という屋号で知られる一家の当主が執りおこなうオトシトリの行事に同行するため、尾形家屋敷跡に立っていた。小々汐は、鹿折地区（旧鹿折村）のうち、漁業を生業とする四ヶ浜のひとつ。一九五九年の調査記録によると、四九戸で構成されていた。四九戸のうち三七戸は「尾

形」姓である。別姓の分家二戸をあわせて、じつに三九戸が「同族団」を構成している。大規模な水田稲作農業を営む地域ではよく知られる本家分家関係だが、漁村で形骸化せずに残存することは珍しい。オオイは、江戸時代には肝煎きまじりとして小々汐をとりまとめ、明治から大正にかけては旧鹿折村の村長をつとめた由緒ある家である「註1」。

この尾形家総本家のオトシトリの行事に、私は大震災の年以來毎年続けてお邪魔している。これで三回目のこととなる。

### 小々汐の尾形家

先の東北地方太平洋沖地震による津波で、五六戸あった小々汐の家屋の五〇戸が流失した。ここにあった尾形



小々汐の尾形家屋敷跡。2013年12月



被災前の尾形家屋敷外観。提供・国立歴史民俗博物館



かるうじて流出を免れた尾形家屋敷の遠景。撮影・山田慎也



4月24日集会所と電柱が撤去されたあと。撮影・葉山茂

家の屋敷も、現在では跡形もなくなっ  
てしまっている。文化七（一八一〇）  
年四月建築。残っていた「御手伝帳」  
という文書がその建築年代の根拠と  
されていた。建築学的にも注目され、  
二〇〇一年一〇月五日に宮城県でおこ  
なわれた第四回建築士会全国大会宮  
城大会の目玉のひとつだった。

津波で流された屋敷の部材の多くは  
「文化財レスキュー」の対象となり、救  
出された。家で祀<sup>まつ</sup>っていたオシラサマ  
も瓦礫の中から発見された。そのオシ  
ラサマはオオイ一軒のみの祭祀対象で

はない。周囲の別家（分家のこと）の  
祭祀対象でもある。救出された屋敷の  
部材は、現在山梨県甲府市の石川工務  
所で修復作業が始まっている。工学院  
大学の後藤治研究室や国立歴史民俗博  
物館の有志により尾形家修復保存会が  
結成され、SOC基金（東日本大震災  
被災文化財復旧支援事業）、公益財団法  
人朝日新聞文化財団、日本ナショナル  
トラストなどの協力を得てのことだ。

千葉県佐倉市にある国立歴史民俗博  
物館第四展示室には、尾形家の「部分  
再現模型」が公開され、在りし日の様





ありし日の気仙沼魚市場。メカ（カジキマグロ）の水揚げににぎわう。2007年3月

子をしのぶことができる。昨年春に民俗部門をリニューアルした同館は、震災前からの計画通り展示を完成した。その経緯と「文化財レスキュー」の様子は『被災地の博物館に聞く―東日本大震災と歴史・文化資料』（吉川弘文館、二〇一二年）に詳しい。

あみのよしひこ  
網野善彦 『古文書返却の旅―戦後歴史学の一齣』（中公新書、一九九九年）

でも詳しく言及されている尾形家である。オオイは、その分野でも知られた文書の伝承者でもあった。今般の津波で、尾形家文書もすつかり流され、当初は絶望視されていたが、奇跡的に二五〇点が発見され、回収されている。私をはじめ尾形家を訪れたのは、二〇〇七年一月九日のことであった。村につたわるといふ「小々汐打ちばやし」について説明に立ってくれたのは四人の尾形さんだった。「同族団」が実際に機能している様を目の当たりにした。

尾形家の屋敷はモノとしてももちろん価値が高いものであるが、その価値は、そこにすむオオイの人びとを中心とした「同族団」が生きて機能していることにも支えられていたのである。



はじめて小々汐を訪問したとき。4人の尾形さんたちに迎えられる  
2007年11月



尾形家に伝わる数々の古文書。2008年10月。撮影・田原範子

## 行事を大切に

気仙沼の一般家庭に最初にありがりこんだのは二〇〇五年の一〇月だった。場所は唐桑半島の宿。鎮座する早馬神社は、梶原景時の兄にあたる景實が流

れ着いて開いたとの伝承をもつ。この村落もこの大震災ではおおきな打撃を受け、六二世帯中五四軒の家屋が流され、解散することになった。『更地の向こう側―計算する集落「宿」の記憶

地図』（東北学院大学トポフィリアプロジェクト、かもがわ出版、二〇一三年）には聞き書きとイラストを用いて被災前の生活の様子が再現されている。その宿にいくつかある梶原家のうち一軒にお邪魔した際、日当たりのよい玄関の小上がりにある八段の巨大な雛飾りを一目見て驚かされた「註2」。

季節外れに出されているのは「虫干しのため」だという。その後何軒かまわつてみたが、女の子のいる家の玄関には同じように壮麗な雛飾りがある。「この地域の子どもたちは大切にされている」と実感した。

大事にされているのは子どもたちや雛飾りだけではない。この地域ではさまざまな年中行事が大切に伝承されて

おり、それぞれ念入りにおこなわれていた。東北各地を歩けばそれは実地に行き届いてきた。いうまでもないが、年中行事のなかでも正月は、非常に重要だ。

『祈りのかたち―宮城の正月飾り』（宮城の正月飾り刊行会編、日貿出版、二〇〇三年）という本がある。この本を紐解けば、毎年正月を迎えるにあたり一新される神棚の飾りがいかに多様か、それぞれの造作がいかに凝ったものであるかがよくわかる。一般に東北地方は神棚・仏壇が豪華であることと知られるが、沿岸部はとりわけ顕著であると、この地域を歩く研究者も口を揃える。

ここでは、オオイの名子のひとつで同じ小々汐に暮らす尾形栄七老（屋号はニンヤ・仁屋）と、民俗学者川島秀一とのあいだにある印象的なエピソードを紹介することにしよう。

「ある日、おじいさんが正月のお門松を山から迎えてくるというので、いつものように、私もお孫さんと一緒に付いていった。何軒かの門松を伐つたのち、次には『お年神様』と呼ばれる松の木を敷の中から探し当てなければならなかった。……私は思わずため息を

つき、『おじいさん、こうやって苦労して取って来るからこそ、お年神様は尊いんだね』と言った。『そんなこと言つてけんの、オメばかりだ』、これがおじいさんの返事だった」【註3】

川島はそれ以上の説明をしてくれてはいないが、年神は人間の苦労によって尊くなるのではない。「自然（じねん）」に尊いのだ、というのが、おそらくニンヤの「おじいさん」の教えであつたろう。

二〇一二年のオトシトリに同行した際には、唐桑、中井のナカイヅマ（屋号）のジンイツツアンが、御崎さん（御崎神社）の先の松林で松を切ってきた。「今年の松は小さいのしかないの」とぼやいていた。おそらくは、「お年神様」となる松が首尾よく見つかるかどうか、あるいは見つかつた「お年神」の姿形や大きさなどによって、迎える年を占う習わしがあるのだろう。

## 「今年は何もなし」

私がオトシトリのことを視野に入れて気仙沼を訪れたのは、二〇一一年一月二八日仕事納めの日。宮城県から東北大学東北アジア研究センターに

委託された「東日本大震災に伴う被災した民俗文化財調査」の調査員のひとりとしてだつた【註4】。携帯電話には、数日前に宮城県文化財保護課（当時）の小谷竜介さんから届けられたメールがあつた。「宮城県では、三〇日が神棚に飾り付けする日ですので、それがおこなわれているかも調べられたら調べてください」

その日は昼過ぎまで小谷さんとも一緒だったが、当の小谷さんは、教育長と教育委員会の担当者に私と同行者を紹介すると、仙台にとつて返してしまつた。不思議だつた。直後にたずねることになつていたのは、小谷さんと震災前から交流があつたはずの、小野寺優一さんだつたからである。謎が解けたのは二年ちかくも後になつたからのことである。自身も被災した小谷さんは、震災後の調査地の苦境を前にして「調査することができない」と告白された【註5】。

小野寺さんは、鹿折公民館の館長である。屋号はイドバタ。このあたりでは一時一世を風靡した鯛網の名前としても有名な屋号である。現在では「お母さんを担いで山に登つて避難した」ことで小野寺さん自身が一躍有名に

なっている。仙台にいたころは、俳優八名信夫ひきいる悪役商会の一員として、役者としても活躍したちよつと変わった経歴ももつ。今年はおトシトリをどうするのか、聞いてみた。

「今年は何もなし」と館長は残念そうに、しかし力強い声で答えた。小野寺さんの家は流され、飾りつけるべき神棚も流出した。先祖の位牌は瓦礫のなから発見されたという。屋号のもとなつた井戸は現在でも豊かで清涼な水をたたえているという。本来なら、母屋には三つ揃えの松、七本のしめ縄を飾り、離れには二段の松に五本のしめ縄、洗面所の水道には三本の輪、また井戸、風呂、離れの水道、トイレ、自転車、自動車、耕耘機、臼、若水迎えの桶など十数カ所に正月飾りをするこゝになつていた。

家屋敷だけではなく、日常生活に欠かせない施設や器具に飾りをする。

当たり前だが、正月は、単なる祝の行事ではない。一年の無事を感謝し訪れた年神を丁寧に迎えて、新年にそなえる。新年会にはオヨロコビという祝い歌が歌われる。たんに新年がめでたい、というのではない。来るべき「福」を招き寄せるためのいわば「呪術」で

ある。また、小正月におこなわれる大漁祈願のモノマネは、大漁の所作をおこなう行事であり、実際の大漁をよび込むための「予祝」でもある。

### 例年どおりに

公民館長、小野寺優一さんの仲介で、浪板のヒワタシ（日渡）の神棚を見せてもらうことができた。この家は津波で浸水したが、神棚は水没を免れた。家の守り神と伝えられる鍾馗様の掛け軸がかけられた一〇センチほど下の壁に津波の跡が残っていた。

「神棚も無事だったので、例年に近いものはしたいと考えている」という。私はちよつと驚いた。浪板二一六戸中二三名の犠牲者が出ているのである。暮れもおしせまるころ全国的には、「自粛」ムードが漂っていたが、想定は完全に裏切られた。すでに飾りつけはすんでいた。

三陸地方では正月に神棚にキリコヤスカシとよばれる紙のオカザリ（お飾り）をする。地域によっては玉紙とよぶこともある。修験の残した慣習といわれている。

ヒワタシ当主、昆野文男さんのお話。



仏壇の横の鍾馗様の掛け軸と「星の玉」「大年神」  
2011年12月



ヒワタシの神棚と「星の玉」どこに何枚貼るかは家によってきまりがある。2011年12月



ヒワタシに代々伝わる鍾馗様の掛け軸の数十センチ手前まで浸水した。2011年12月



大年神。2011年12月



左から、「大黒」「事代主」「星の玉」二枚、「大漁」「万作」「千万両」「餅」「宝船」「窯神」

「七房のついたしめ縄、スカシ、(紙の)網、星の玉(宝珠の玉の意という)を七枚セットになったものを天照皇大神宮の札と一緒に八幡神社から選ばれた総代役が一月一日に祓いを受けてもらってきである。

星の玉は、松竹梅や万両カブなどと一緒に海老が描かれたもの。父の代でしめ縄は自分でつくるのをやめたが、昔は自分でつくっていた。

しめ縄からは、左から七本、五本、三本、五本、五本、三本、五本、三本、三本と藁の房を垂らすことになっている。

『開運福祿寿』のスカシは、鹿折八幡神社宮司がつくったものである。仏壇の左にしめ縄、その下には星の玉二枚、右に紙の網と御幣、下には左から星の玉三枚、大黒主。右正面上には恵比寿大黒が祀られ、その下には、事代主、星の玉二枚、『大漁』『万作』『千万両』『餅』『宝船』『窯神』を貼る。この飾りつけの仕方は、各家で代々形が受け継がれており、家によって違っている。

恵比寿大黒の右手にはお守りをおさめる棚があり、長磯の種葉神社、厳島神社、八雲神社、成田山新勝寺の札が

ある。四代目が成田に参ったときのものだという。「現在ならともかく当時成田山に参るのは大変だったろう。」という。現当主は一六代目である。

「三十一日と元旦は、床の間でお膳を囲みます。オガミゾナエといって箕にお餅をふたつ入れて松の枝を乗せておきます。四方拝して餅を切り、囲炉裏で焼くのが当主の正月の大切な仕事です。松の枝と赤と白の幣束が置かれている供物台には、挨拶に来た方のお祝いを置くことになっています。」

水産加工業を営んでいたヒワタシは、震災で工場を失った「註6」。けれどもヒワタシ当主は、オトシトリも正月行事も自粛や簡略化は全く考えてはいなかった。ただただ例年通り、肅々と行事をおこなおうとしていたのである。

その後、私は市内ではいち早く復旧したイオンを訪ねた。新年を迎えるための買い物客でことのほかにぎわっていたのが意外でもあり、安堵させられたところもある。

震災前から面識のあったオオイの当主と人を介して連絡がつき、オトシトリに同行できる、ということになったのは、その晩のことだった。





尾形家住宅があった小々汐。撮影・葉山茂

## 屋敷跡で

二〇一一年一二月三〇日。場所は小々汐の屋敷跡。強い風が吹いていた。まだ瓦礫の山が残っている。

「現在住んでいるアパートはいわば『仮住まい』なので、妻が購入してきた市販の長方形のしめ縄を下げるぐらいだが、流された自宅跡で何か所か拝みます」とオオイの一七代目当主、尾形健さんは言った。一〇時半から家族で二手に分かれてミョウジン（明神）さん、イワクラさん（お天王さん）、金毘羅さん、オクマンさま（三峰神社）、イドガミサマ、以前あった蔵の跡地を拜んだ。金毘羅さんの石鳥居は津波の直撃を受けたとみえて、途中から折れて倒れていた。

今回は例年とは違う。しめ縄と御幣束を合わせて簡略化したものをガムテープで接着し、よりしろとした。オハネリといい、巾着から米を三回ずつ撒き、二礼二拍一礼、四方拜。言及したすべての神と八幡様、および金華山の方角を拜んでいるという。オクマンさまは、丘をひとつ越えた高台にある。二〇〇年ほど前に移転するまでは屋敷があったとされるところである。イド



津波で鳥居が破壊された金毘羅さんに参るオオイ当主  
2011年12月



夫婦でミョウジンさんに参る。2011年12月



即席のよりしろ。2011年12月



山火事で焼けたオクマンさまの鳥居を示すオオイ当主  
2011年12月

ガミさまはその当時井戸があった場所とされている。高台から海辺に移転したのは、イワシ網漁を本格的にはじめたことがきっかけとされる。漁業が大规模化、効率化し、その利便を考えることとみられるが、詳細は伝えられてはいない。

イワクラサンは、屋敷跡から山に登った山頂付近にある。この山の中腹から頂上付近までも、火事の名残が至る所で見られた。山中に石でできた社があり、そこに飾り付けをする。左右の松にしめ縄をくくりつけ、餅を供える。しめ縄の房は五房あり、かきだれは四つ垂れ下がっている。本来なら、松の木にしめ縄と一緒に松の枝もくくりつけるはずだが、この年は省略された。また餅も例年は自宅で行っていたが、市販品で間に合わせた。蔵は今回の震災で流されてしまっていて、今はプレハブが建っていた。蔵にもしめ縄を飾り付けていたそうだが、プレハブにはくくりつけられるところがなく、他の所と同様にしめ縄と御幣束を合わせたものを置いただけで終わった。現在は手元がないオシラサマの布も暮れに交換するはずだった。この布の交換をカミサマという民間宗教者がお



ミヨウジンさまに参る。2012年12月

こなう家もあるが、オオイでは家長がおこなう。正月一日の午後にオシラサマを出し、一六日に地区の方がやって来てオシラサマオガミをしてからしまうことになっている。

金毘羅さんの石鳥居は津波で破壊され、ミヨウジンさん、三峰神社の木鳥居はいずれも津波後の山火事で焼失していた。オシラサマ同様、これら神様は、オオイだけで祀っているのではないが、「元の通りに修復するのは、別当べつどう「註7」でありオオイである自分の責任だ」と、尾形氏は話した。



親子でオクマンさまの鳥居に注連縄を張る。2012年12月

\* \* \*

一年の歳月が流れ、翌二〇一二年のみそか。私が再びオオイのオトシトリに同行してみると、焼け落ちていた鳥居ははやくも再建されていた。金毘羅さんの鳥居もきれいに除去されていた。昨年同様にミヨウジンさん、金比羅さん、イワクラさん、オクマンさま、イドガミさま、蔵の跡地を拜む。巾着から米を撒き、二礼二拍一礼して拜む。今年は、息子さんが一緒だった。このあたりでは長男はカトクとよばれ、さまざまな面で特別な扱いを受ける。も



鳥居に松も飾る。本来は所有する山から選んてくるが、今回は市販品。2013年12月

とより文字通り次世代、第一八代目の家督の継承者と目されていることである。

ミヨウジンさん、オクマンさまの再建された鳥居に、親子で注連縄を張った。強い風で注連縄が吹き流しのようになびく。息子が背伸びして注連縄を張るのを、倒れないよう父親が支えた。

数百年後を見すえた  
行事の準備

時と場所は、本稿冒頭に戻る。  
二〇一三年のみそか、小々汐の屋敷





ミヨウジンさまを拝む。餅も供える。2013年12月

跡の更地である。所作は、昨年と同じ要領である。ただし、供え物の餅が加わった。紙の上に置くが風に飛ばされそうになる。鳥居の注連縄にも松の枝が飾られた。本来は山にはいつて「年神様」とともに選んでくるはずだが、「市販品です」とのことだった。ミヨウジンさまへのお参りが済んでトラックへ帰る際に息子さんは先祖の墓に静かに手を合わせた。

この場所に屋敷を再建して、この土地に戻る、というオオイの希望は叶えられないことが決まっていた。今後の大地震とそれに続く津波にそなえて尾形家が高台に移転するからではない。

かねてから住民の悲願だった大島架橋の建設が、震災復興計画のなかで急速に現実化した。屋敷跡地は橋につながる本土側取り付け道路の建設予定地になっていた。大島架橋自体は震災以前からの計画で、このあたりを通るルートは二〇〇八年二月二四日には公表されていたが、震災がなければ屋敷地が該当することはなかったはずである。何度も話し合いをもったが、功を奏すことはなかった。「それはもういいんです」と尾形さんはいう。翌日は大晦日という年の瀬だから工事車輛



ミヨウジンさまの鳥居の位置を、取付道路の建設にあわせて山側に移動した。2013年12月

や作業員の行き来こそないが、工事用のフェンスが張られ、もう工事ははじまっていた。

それでも尾形さんは、橋につながる道路の隅からミヨウジンさまの鳥居に至るわずかな小径（こみち）を、何とか確保することができたといつて微笑んだ。鳥居も少しだけ山側に移動して、工事の影響を受けにくいように配慮した。このわずか数センチ幅の小さな小径を確保する、そのことがどれほど長期的に将来を見通したうえでのことであるか、私はすぐには気づかなかった。





イドガミさま。明確な目印はないが、毎年お参りを欠かさない。2013年12月

オオイが約二百年前、一八一〇年に高台から屋敷を移して以来、毎年大晦日には欠かさず旧屋敷跡に赴いて手を合わせていたように、オオイが今後どこに移転することになると、大晦日には毎年この小径を通ってここを訪れ、鎮座する神々に手を合わせるつもりなのだ。おそらくは数百年後も、オ

オイの子孫の続く限り、数千年後も。未曾有の大震災の年に、鳥居が津波で倒壊しようと鳥居や祠が山火事で焼失しようとして、例年とかわらぬおこなわれ、驚くほど長期的な未来を見すえていた。

私は尾形さんの静かな言葉の裏に、その覚悟を悟った。莊厳とも思える、その覚悟に心が震えた。尾形さんの横顔がにじんで見えた。

しかし、尾形さんは、それは覚悟などではない、あたりまえのことなのだという。

せいぜい数十年しか考えに入れていないもろもろの世俗の計画とは、なんと次元が異なることか。

やっぱり、風は変わらぬふきつけていた。数百年後の小汐の大晦日にも、同じようにふきつけることだろう。

〔協力〕

葉山茂（国立歴史民俗博物館特任助教）

〔註〕

1 肝煎は庄屋や名主にあたり、仙台藩からの命令伝達や執行の補助、村から藩へ申し入れる意見の集約などを受けもつ役。

2 一般に七段の雛飾りは高度経済成長期に、八段の雛飾りは、バブル期に特徴的な豪華なもの、とされる。

3 川島秀一『津波のまちに生きて』富山房インターナショナル、二〇一二年、三二―三三頁。

4 詳細は二〇一二年、二〇一三年に出版された報告書の他、高倉浩樹・滝澤克彦編『無形民俗文化財が被災するということ―東日本大震災と宮城県沿岸部地域社会の民俗誌』新泉社、二〇一三年に詳しい。

5 真意は完全にははかりかねるが、精神的につらく、調査することに葛藤があったということであろうと推測された。私も重ねてそれ以上尋ねることができなかった。

6 ヒワタシは二〇一二年三月に工場再建を決意し、九月七日に新工場を再建。現在では水産加工業を再開している。

る。経緯は相澤卓郎「遊び」としてのカツオ節業再建―水産加工のマイナー・サブシステンス論」金菱清編『千年災禍の海辺学―なぜそれでも人は海で暮らすのか』生活書院。

7 この地域では、神社や祠の責任者をひろく「別当」とよんでいる。

特集

## 復興への道 3